

---

# 暁の神話～風と翼の物語～

漣 風流

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暁の神話〜風と翼の物語〜

### 【Nコード】

N3938Z

### 【作者名】

漣 風流

### 【あらすじ】

三柱の神が創りし世界『ラルグアーク』。そこにはかつて、人間の他に竜や精霊、亜人、そしてそれらの種族の混血と言った種族が国や町を作り、十二の精霊の長と四の竜の皇によって保たれた秩序の元で暮らしていた。

しかしその秩序は、一柱の精霊1人の青年と結ばれ、消滅した事で均衡を崩した。

これは滅びに向かう世界と、その世界を仲間たちと共に駆け抜けた風の少年翼の少女の物語。

## 序幕

かつて、世界がまだ明確な形を持たず、混沌としていた時代に、三柱の兄弟神が存在した。

一柱は想いを具現化する『創造』の力を持つ、白く光り輝く秩序を司る女神にして末の妹神。名を『創造神』アルトルーネ。

一柱はあらゆる物を破壊し、終局と滅びを与え司る、三柱唯一の男神にして黒く煌く角を持つ兄神。名を『破壊神』ラルハザード。

そして一柱は万物万象を移ろわせ、自身も変化変容、存在を司る者にして二柱の姉たる女神。流転神とも呼ばれる『存在神』ゼノヴィア。

三柱の神は混沌としている世界にそれぞれ手を加え、六つの大陸と無数の島々、広大な海と空を定め、創り上げた。

そして完成した世界に、自分達の初めての子として名を付けた。全てを慈しみ、育む世界 『ラルグアーク』と。

創造を終えた後、三柱はその世界の中心に降り立ち、交わり、数多の生命を生み出した。

創造神アルトルーネと破壊神ラルハザード、存在神ゼノヴィアの三柱の間には十一の属性を持つ精霊が。

存在神ゼノヴィアと破壊神ラルハザードの間には龍皇を始めとした竜族の他、聖獣や魔獣と言った獣達が。

そして破壊神ラルハザードと創造神アルトルーネの間には人間と、エルフやドワーフ、有翼人や獣人と言った亜人族が産み落とされた。

産み出された存在は、一部のモノを除いて皆、死すべき運命を持っていた。

世界とそこに生きる命達を産み出した後、三柱の神々は精霊と竜

にそれぞれ役割を与えた。

精霊の頂点たる十一の神霊には各々の力で以て世界の秩序を担い、安定をはかる事を。

竜族の頂点たる四の龍皇には四つの特殊な属性を与え、世界を支える柱となり、見守り続ける事を。

それぞれに役割を与えた後、創造と破壊を司る二柱の神は眠りに就いた。深き、覚める事のない眠りに。

そして残った存在を司る一柱は、その存在力を自ら墮とし十二番目の神霊となり、彼等に混じり世界の秩序を見守る役を担った。

神々が眠りに就いた後、残された生命達は世界中に散らばった。

殆どの生命は草原の大地に残ったが、ある者は山や洞窟、森へ行き、またある者は海や川、湖と言った水の側に向かい、そしてある者は天空へと住処を求めて昇って行った。

役を与えられた神霊と龍皇も、方々に散らばり、己の領域を創り上げた。

源は海に、花は森に、水は湖に、火は火山に、地は山に、氷は氷原に、風は溪谷に……それぞれの属性に見合う場所に居を構え、秩序を見守り始めた。

龍皇も、ある者は洞窟に、ある者は天空にと言った具合に領域を定め、世界を見守り始めた。

役割を与えられなかった、人間を始めとした創造神と破壊神の子供達は地上にて集落を作り、暮らし始めた。

これがラルグアークの始まりである。

突き抜ける様に澄み渡った蒼天の下。風がそよぐ、色とりどりの花が咲き乱れる丘の上の開けた場所。

そこには古びた二つの石が、花に包まれ、寄り添うように存在していた。

形は二つとも、縦に短く横に長い長方形。自然界には有り得ない、歪みのない直線を描くそれは人の手により作られた事を示している。見る者が見れば、それが石碑か、あるいは墓碑であると気付くだろう。飾りの様な物が見えないあたり、墓石と言った所か。

かつては滑らかだったその表面には墓の主の名が刻まれていたのだろう。しかし風に曝され、雨に打たれて風化し、削られたのか、刻まれていただろう文字は失われ、読み取ることが出来ない。古い、とても古い墓だ。

花に囲まれそこに寄り添うように在る墓石は、まるで夫婦の様に、恋人同士の様にも見える。

その墓の前には合わせて二つ、異彩を放つ物が在った。

一つは弓。闇を凝縮したような、しかし艶やかな、何もかもを包み込む夜の様な印象を見る者に抱かせる、漆黒の大弓。牙の様にも角の様にも見える、力強く、荒々しい形状を持つそれは、武器に疎い者が見てもかなりの強弓だと分かるだろう。

一つは剣。汚れ一つない純白の、しかし陽の光に照らされて薄く桜色に輝く、美しい両刃の長剣。護拳の部分は翼の様にも、花卉の様にも見える。隣に在る弓に比べると線が細く、繊細で女性的な、しかし劣らぬ程の力強さを見る者に抱かせる。

古びた墓の前に在るそれらは二つとも、まるでつい先日作られた様に滑らかで、美しい。

花の咲き誇る場所には不釣り合いな、相応しくない筈の、異彩を

放つその二つの武具。

しかしそれらは何故か、違和感と言ったモノを欠片も感じさせず、むしろそこに在るのが当然と　否、そこに無ければならない物だと感じさせた。

穏やかな風が吹き、丘を、花を、そして武具と墓石を撫でる。

静寂。音も何も無く、ただ静かな時間と空間。

墓ではあるが、そこに墓所の様に陰鬱とした空気は無く、神殿に居る様な静謐とした空気を感じさせる。

と、一陣の突風が吹いた。

それは風に揺れていた花を散らせ、花弁を空へと巻き上げる。墓を中心として、散らされた花弁は渦を巻きながら空へと昇って行く。

花弁の渦と、地から空へと向かう花吹雪。

その花吹雪の中に、人影が見えた気がした。

数は二つ。一人は黒い、短い髪の少年。腰には矢筒を付け、黒い衣装に身を包んでいる。

もう一人は銀に煌く、腰まである長い髪の少女。白いドレスの様な衣装に身を包み、背には一對の、白鳥の様な大きな、純白の翼を持っている。

二人はそれぞれ、少年は黒い弓と、少女は白い剣と重なる様に浮かんでいる。

薄く、半ば透き通っている様に見える彼等は互いを見て、柔らかな微笑みを浮かべている。

そして、どちらともなく手を伸ばし、その手が互いの指に触れようとして　直後、強風が吹き、花弁をさらに巻き上げ二人の姿を覆い隠した。

僅かな間の後、その花吹雪が空へと消えて行くと、二人の姿もまた幻の様に消えていた。

残ったのは寄り添うように在る二つの墓と、白と黒の二つの武器。それらは陽の光に照らされ、キラリと一度、何処か寂しげに輝いた。

天空は見守る。流れる風と雲、太陽と月、無限に煌く星々を抱え、時に荒れながら、世界に生きる全ての出来事を。厳格な父の様に。大地は記憶する。遙か古に存在した国と、そこで暮らしていた人々の想い、戦いの激しさ、地に生きた全てを。忘れ去られ闇へと埋もれ、そして消えていった数多の歴史を。

大海は安らかな眠りを与える。流れを揺籠にし、波音を子守歌として、時に凧ぎ、時に荒れながら、その深きに沈んだ多くの船と、星の数ほどの命を母の様に内へと抱いて。

季節は移ろう。花の咲き誇る春季から雨が降り注ぐ雨季、燃える様に熱い夏季。風がそよぎ、多くの作物が芳しく、黄金色の実りを結ぶ秋季。そして凍える様に冷たく寒い冬季へ。繰り返される輪廻を表す様に……風と共に。

風は知る。忘れ去られた古の叡智と、今を生きるあらゆる命の営み、秘められた想い、移り変わる世界の在り方、不確かな未来の形を。

風は巡り行く。空を、海を、大地を、山を、森を、洞窟を、街を……世界中のあらゆる場所を流れ行く。

風は運び行く。人々の笑い声を、恋人達の愛の語らいを、喪ったモノを想う嘆きの声を。

温かな食事の匂いを、豎琴の麗しい音色を、故郷への手紙を。

小川のせせらぎを、花の種子を、荒れ狂う嵐を、移り変わる季節を。

連綿と続く歴史を、定まらない未来を、そして……想いを。  
近くにも、遙か遠くにも。

風は流れ行く。何者にも捕えられず、しかし自由と言う名の鎖に  
捕われ、縛り付けられて。天を、地を、海を……永久とこしえに、流れ行く。  
風は移ろわせる。流れ行く時と共に、新しきものを古きものへ。  
鋭き物を鈍き物へ。美しき物を醜みにくき物へ。生ける者を死せる者へ。  
未来あきを現在いまへ、現在いまを過去むかしへ、そして……過去むかしを忘却いにしえの彼方へと。

谷を、砂漠を、湖を、山を、氷河を……世界を巡り、詩人は謳う。  
夜空に瞬く星々が描く神話、伝説を。人々が祈り紡いだ、数々の  
物語を。

数多の神々の物語、海に沈んだ伝説の大陸、英雄達の冒険の軌跡、  
勇猛な戦士達の戦い、騎士と姫の叶わぬ恋を。世界の理と、忘れ去  
られた多くの命の物語を。風の行方を。

古の時代キオクを、風に乗せて語り継ぐ。未来へ、遙か未来へ……。

これは時に埋もれ、忘れ去られた、遙か古の物語。

まだ世界に人と亜人、竜と精霊が共に暮らしていた時代の物語。  
始祖たる三神と、その子らたる精霊、世界の柱たる四の龍皇。空  
の民と大地の民、亜人の国、人の国と四の一族。そして一人の青年  
と、その伴侶たる暁の精霊の子孫の物語。

さあ、語ろう。

歴史に記されず、時の彼方に忘れ去られた、しかし確かにかつて  
の時代を生き、そして消えて行った人々の物語を。

その生涯を風のように駆け抜けた、暁を継いだ風の少年と翼を持つ  
王国の王女、そしてその二人の仲間達と、世界に拒絶された者との、  
存在を賭けた戦いの物語を。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3938z/>

---

暁の神話～風と翼の物語～

2011年12月14日00時53分発行